

兵庫陶芸美術館 特別展
丹波の茶道具 — 茶の湯を彩る兵庫のやきもの —
 2023年3月18日(土)～5月28日(日)

日本六古窯の一つに数えられる丹波焼（丹波篠山市など）は、平安時代末期に開窯します。中世を通じて壺、^{かめ}甕、すり鉢を中心に、無釉の焼締陶器の生産に終始しますが、近世をむかえると新たな展開を見せます。赤土部や灰釉などの装飾技法で器面を彩り、文化や経済の中心地である上方に向けたやきものを生産していきます。こうした地域で茶の湯が流行すると、他の産地と同様に茶道具を作り始めます。丹波では、諸種ある茶道具の中でも水指や花入を多数製作しています。とりわけ水指には、造形や釉調が整った手桶形に優品があります。古い茶会の記録を見ると、当時、籐や竹で編んだ籠花入や木製の手桶が水指や花入として用いられています。新しいやきものの茶道具を生み出す際に、これらの造形が取り入れられたと考えられ、ヘラなどの工具で胴部を削って籠の編み目を表現した耳付花入（**図版1**）や紐状の粘土を胴部に貼り付けて籐を表現した灰釉手桶形水指（**図版2**）が作られました。

丹波の茶道具には、工具で素朴な文様を施したものや端正な形状のもの、やきものではない別の素材で作られた茶道具の姿形を模したものなど、当時の茶人の流行や好みが見られます。また、暮らしの中で使うために作られたものが茶の湯に適した道具として茶人に取り上げられ、茶道具に見立てられたものもあります。

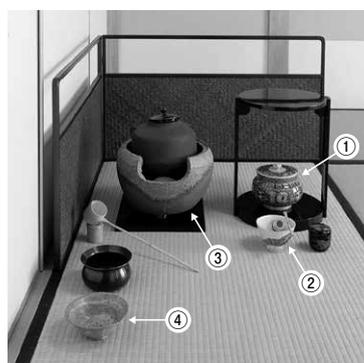
本展では、各時代の茶人に大切にされ、今日まで受け継がれてきた丹波の茶道具の魅力に迫ります。加えて、当館の所蔵品を中心に兵庫県で生み出されたさまざまなやきものを取り合わせて、展示室内に濃茶の席、薄茶の席、懐石の席をそれぞれ再現します。丹波で活躍する現代作家の作品も含め、各産地で作られたやきものの茶道具を通して、茶の湯文化の一端を紹介します（**図版3**）。



図版1 丹波「耳付花入」
 桃山時代～江戸時代初期
 (17世紀前半)
 兵庫陶芸美術館



図版2 丹波「灰釉手桶形水指」
 江戸時代前期 (17世紀)
 兵庫陶芸美術館



図版3 茶道具の取り合わせ

- ① 王地山「染付祥瑞写水指」
 江戸時代後期 (19世紀)
 兵庫陶芸美術館
- ② 珉平「色絵海老文茶碗」
 江戸時代後期～明治時代前期
 (19世紀)
 兵庫陶芸美術館 (田中寛コレクション)
- ③ 二代 市野信水「土風炉」平成17年 (2005年) 個人蔵
- ④ 淡陶社「伊羅保写茶碗」明治時代～大正時代 (19世紀～20世紀) 兵庫陶芸美術館



兵庫陶芸美術館
 学芸員 萩原 英子